

平成30年度第1回宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議情報交換会

開催日 平成30年7月5日(木)

13:00~16:00

会場 JAビル宮城11階大会議室

1 主な意見・内容

【Aブロック】

テーマ：生活支援COと協議体の活動状況について

- 協議体の在り方について模索中。
- 協議体ではなく勉強会として続けている(一般の人も来る)。
- ワイワイガヤガヤが難しい。
- 33団体あり大所帯。年3回集まり意見交換をするが、意見が出づらくまとめるのが大変。シーンとした会議になってしまう。ゴールまでのプロセスの方向性がとりづらく、時間を要する。
- 行政・社協と参加できる人が少ない。メンバーが同じになりがち。悩み：徐々に大きくしたい。
- 地域に根差している。他地域から視察に来る。市で「デマンドタクシー」をつくった。2層がなく、1層と3層のみであるが、話がまとまりやすい。
- 生活支援COになりたて。様々な声を聞き教えてもらっている。(昔からの地域の習慣など)
- 第1回協議体：6月 第2回：1月予定 課題：交通の便がよくない。
- 年3回(H28~), H29社協へ委託。自助の気持ちは高い。サロンの中心人物が高齢化。共助の姿勢も見えている。地域回りに従事。
- 協議体あり。運営推進員 事業の推進を考える⇒1層の協議体。
- 第2層生活支援CO配置(50行政区), 地域をまわって地域の状況把握。お茶っこの会, 婦人会顔出し, 生活支援COのPR, 地域の困りごと把握。
- 各包括生活支援CO1名配置。サロン運営交流会, 自分たちでやらなきゃを繰り返して伝えている。住民にも意識が芽生えてきた。

テーマ：関係機関, 団体との連携, 情報共有について

- 新任で人を知らない。
- 2層協議体が13ある。
- 社協と包括が一緒
- 行政・社協, 役場に社協が入っている。
- 槻木包括は生活支援COとつながりが無い, 何をしているかわからない。
- 大崎には社協と包括に生活支援COを置かない。一般の生活支援COを配置。
- 民間と生活支援COと情報交換している。
- 包括に生活支援COがいない⇒社協にいる
- 蔵王町・白石市…直営
- まちづくり担当所管連携。まちづくりをそのまま活かす。4月び2層協議体がスタート。第1回連携会議(顔合わせ)
- 生活支援CO部会開催
- 8包括集まって会議+社協職員…情報交換等, 地域ケア会議で報告会…見守りについて話し合う(町内会, 民生, 老人クラブ, HP, 介護事業所 etc) 市包括全部集まる会議 評価表(活動): 年2回
- 介護予防事業所との連携(生活支援COの役割伝える) お互い情報共有。
- 温泉デイサービス(温泉送迎バス) 始まった…社協に委託(日中お客がいない時間で) 包括も連携協力してる。15名程度参加(参加料1000円以) 民生委員・老人クラブとの連携は大事。

テーマ：組織内部の連携，体制づくりについて

- 人が変わる…
- 層（1，2）によつての考え，立場の違い。
- 1層，2層の委員になった。2つの地域の団体に両方参加している。あまり意見は主張しないようにしている。
- 行動計画は自分で決めて動いている。生活支援COの動きが見えないと言われる。（他の包括職員と動きが違う）
- 3職種＋生活支援CO（ミーティングで状況報告）。総合相談はやるけどプランは持たない。サロンまわり，行事（認知症カフェ etc），ケアパスの運営委員をうまく活用していく。大事な話の時は所長やNSと生活支援COで。CUとの連携（初期集中がらみで）何をしているかわからないという状況にはしない。
- 活動状況…決裁を受ける。（文書・写真）新事業立ち上げ…局長と生活支援COで，理解を得られるような報告説明を意識している。
- 生きがいデイサービス協力はある。社協と包括との連携見えていない。記録して，10か所で共有できるようにになっている。共有フォルダで職員間共有出来ている。
- 保険者との連携出来ている。関係所管でも回覧できるようにしている。生活支援CO（5月）社協と週1回打合せ…今後月1回の情報共有。包括と保険者との距離が近すぎ…線引き難しい。

その他

- 広報誌の活用
- 会議が多く重なつてものも多い，協議体の話がどこへつながっていくのか，先のつながりが見える…
- 生活支援COをどう伝えるか，アピールするのか
- お茶飲み等に呼ばれた時の会費はどうすべきか…⇒昼食分と会費がある時は払う…
- 役割をかけるのが大事。分担する。包括，生活支援CO
- 漬物レシピ，野菜作り，たらしもち，ほっこりの里（ニラもち）
- ヘルパーと間違えられた事あり（名称で…）独自にわかりやすいものを作って説明した。
- 包括ワンストップ：困つた時の包括で，住民の為に各機関との連携は大切!!
- 生活支援CO：サロン等で楽しい！田舎のばあちゃんが増えたみたい。
- サロン担当職員が（44か所）いる。サロンの記録（用紙あり）

【Bブロック】

テーマ：生活支援COと協議体の活動状況について

- 委託の問題（町長？社協？）
- どんな内容でやっているか
- 委員からこんなことしようという企画案。
- サロンを回つて見える化（冊子，広報誌，社協だより）
- お宝発表会，サロン交流会，住民説明会，寸劇，ワークショップ，サポーター養成講座実施
- 男性の集いの場づくりに力を入れ始めた。
- お宝探し終わった。集いの場，特に男性が集まれる場づくり，お茶飲み，世代間交流のイベント
- 第2層・1層⇒作り方は様々だった。
- 8地区67サロン，1年ですべてのサロンを歩き，冊子にした。サロンには助成金がでる。サポーター養成講座は，100人以上が卒業している。
- サロン訪問し，話を聞き，社協だよりに載せている。体制整備広報誌年4回作成，委員に作ってもらふ。

- 方向性が見えない・生活支援COは何をする人との意見あり。⇒地域福祉計画に合わせて。
- 「お店がなくなる」をテーマにワークショップを年5回開催。住民討論会開催。ワイワイガヤガヤ⇒方向性や色々と拡がりが見えて来た。若者⇒鳴子再生プロジェクト、
- 生活支援COは包括に配置。地域のカラーに合わせて協議体づくりをしている。
- 5/27協議体実施。顔合わせを実施。地域やサロンへ出て活動している。
- 赤い羽根の助成金を使った活動をどうするか考えている。
- 仙台市は協議体がない。支え合い、防災についてケア会議していきたい。サロン、老人会に顔出し。続けていくための支援。人員不足などが課題である。
- 一般から選ばれた2層小原地区。広報1ページで1か月の報告をしている。市からカメラ、車、パソコンを支給されている。情報を発信している。
- 1層1人2層2人 サロン、行事、4、5、6月は顔を売る。情報誌、A4、毎月配布、サロン、報告。小学校区で話し合いの場を作っていく予定。
- 顔見知り、座談会やる予定。協議体まだ設置していないが話し合いしている。

テーマ： 関係機関、団体との連携、情報共有について

- 社協と町の連携 打合せの頻度。
- 生活支援CO連絡会議…話し合う時間不足（月に1回だと足りない）
- 大和町の行政+社協+包括のチーム作りすごい!!
- 生活支援CO、生活支援CO定例ミーティング…生活支援CO同士の話し合う時間は必要。
- 社協+包括と月1回話し合いを行っている。
- 月1回情報交換しているが…足りない。（包括側）
- 協議体の方向性。話し合いで行政であまり積極的に話さない。
- 地域に出ているが、活動報告のところで、課題を多く言ったら、もっと良いところを見つけるように言われた。
- 逆に課題がない。
- 生活支援COは何を中心に動けばいいのか。地域の人が知らないことを良いところを発信して行きたい。
- 市のホームページにチラシを載せている。取材はロコミ。
- 1層、2層、連絡会をしている。生活支援COの動き方。地域支え合い推進委員が（生活支援CO）←こっちのほうが老人受けが良かった。
- チラシで宝物は何かというのを発信。ラジオで発信。

テーマ： 組織内部の連携、体制づくりについて

- 内部が大変だった。
- 職員全員が生活支援CO研修を受けた!!
- お宝探し。つないだその後はどうするのか。
- 人材不足などは、フォローアップ、活動を続けていくために…。
- シソ巻きづくり。旬などを発信。
- 兼務だと忙しい。生活支援COの仕事を包括のスタッフも理解してくれている。
- 近くの町の生活支援COと交流しているのか？意見交換、交流会がしたい。

自由記述

- 移動の問題 高齢化から一番多く上がる問題。 制度・サービス・住民の助け合い。
- 広報の在り方 掲載することで住民がやる気アップ。町から見える化要望。
- 第2層協議体⇒第1層協議体まで持っていけるか。

- 地域に合わせたテーマ。
- 協議体が会議体になりつつある。
- テーマが無くても顔を合わせる大事!!

【Cブロック】

テーマ：生活支援COと協議体の活動状況について

- 協議体のメンバーを固定すると面白くない。
- ルールを決めすぎず話が出来ると楽しい
- 宝探しと集いの場の立上げ（資源開発）
- 2層協議体をメインにやっている。その中の1つの協議体はより細かな協議体のようなスタイルをとっていて、協議体が活発化した。
- 協議体のメンバー様々。⇒いろいろな意見が出てくる。メンバーと一緒に町を散歩し、文化や良さを再認識した。
- 運動グループやサロンなど訪問している。サポーターの高齢化により運営難しくなっているグループもある。
- 地区社協の活動が活発。もともとあるネットワークに協議体や生活支援COをうまく溶け込ませていく必要がある。
- 地域づくり委員会が生活支援COを兼務。顔が見えていなかった人たちとつながっていくことが必要。
- 協議体メンバー⇒地域の文化などに興味ある。⇒盛り上がれば住民自ら次回の話し合いについて「やろう!」と言ってくれた。
- 生活支援COと社会福祉1名での2名体制
- 生活支援CO1名（自治会長さんが生活支援COになっている所もある）
- 民協，老人クラブ，各事業所（ケアマネ），町内会長，薬局⇒協議体
- 商工会，JA，NPO（福祉部）
- 毎月生活支援CO通信を発行し全戸周知に力を入れている。
- 介護予防，つどいの場に力を入れる⇒協議体で話し合う

テーマ：関係機関，団体との連携，情報共有について

- 行政，包括，生活支援COでその都度行っているというところが多かった。
- 地域のサロンに一般企業（味の素）と連携して開催している。
- NPO法人との連携。
- サロン情報等については社会福祉協議会に情報をもらったりしている
- 随時各団体や機関と情報共有を行っている。
- 郵便局，コンビニでの見守りの話し合い。
- 生協 どんなニーズがあるか（サロン相談）

テーマ：組織内部の連携，体制づくりについて

- 組織内での生活支援COの動きを理解してもらう取組みが必要。
- 地域づくりは時間がかかる。組織づくりも時間がかかる。
- 圏域会議を開く時には目的を持って開催する。（目的のない会議が多いと感じる）
- とても自由に生活支援COが動いている。社協内の理解もある。（全員研修受講済み）
- 包括職員異動ある。みんなで地域を観光し，地域を知る＋職員同士の交流もはかれた。
- 旧町単位で協議体や生活支援COを配置しているが，色々なしがらみがあるようで生活支援COから不満の声もある。
- 兼務が大変

- 成果を示しづらい
- 行政との共催

自由記述

- それぞれの組織（自治会、企業など）でもそれぞれの問題がある。
- 生活支援COの役割って何？ お宝の気付かせ役。 悩み・困りごと→行政や包括や社協などへのつなぎ役
- あえて生活支援COと名乗らない。まずは自身の名前と顔を覚えてもらう。
- 協議体要綱，生活支援COの役割をつくっている。
- 楽しいから続けられる。
- 地域づくり 大きさない
- 他地域社協の勢力が強い
- 何をしたいのか分からない。

【Dブロック】

テーマ：生活支援COと協議体の活動状況について

- 地域アセスメント（基礎情報）の重要性。
- 業務による業務量⇒メリット，デメリットがある。
- 協議体の認識の仕方
- 委員の選出
- 協議体⇒新団体創出または既存団体
- 協議体のネーミングが固い。住民にはわかりづらい。
- 仕組み作りがしっかりしているもの。緩やかでもいいもの。
- 協議体2層，月1回開催。すでに2年経過しマンネリ化している・・・。
- テーマを毎月決めていた（H29）⇒結論が出ない（ガヤガヤ…）
- H30のテーマ“地域を元気にしよう！！…着地点が見えない…。
- メンバーは一本釣り。盛り上がるが…結論が出ない⇒そもそも そういうもの…⇒はたしてそれでいいのか？
- 1層協議体⇒団体の長が多い
- 悩み，目標の設定がしづらい。⇒設定しても実現が難しいという意見も。
- 1層は人の入れ替わりが多い
- 1層で地域の実情を知る難しさ。
- 2層は“ガヤガヤ”している。
- 1層生活支援COが2層生活支援COと行政職員との板挟みになっている。

テーマ： 関係機関，団体との連携，情報共有について

- 既存団体への入り方
- 仲間をつくる（関係機関等）
- 行政プランが見えない。目的，目標を示して欲しい。→共有，共通理解が…。→話し合う場が必要。
- 成果の評価について
- 時間がかかること
- 数値で表せない評価
- 人事異動の問題
- 協議体と行政の動きがリンクしない。
- デマンドタクシー（行政）足の問題（協議体）

- 行政内の連携と協議体をどうリンクさせるか
- 町づくりに最終的になる（人口減など）地域おこし協力隊。
- 結果が出ないことへの”もやっと感”
- 生活支援COをコーディネートする人は大切（ex. 担当職員）

テーマ： 組織内部の連携，体制づくりについて

- 引継ぎがない場合もあり，地域のことがわからない。→孤独につながる。
- 結果を求められる…。

自由記述

- 対象者像がこどもから高齢者へ
- 地域の宝探し→夜，休日行くべきか?→行けば行ったで業務量が…。
- フォーマット（記録）をどうしたら…。
- 新しい言葉が多すぎ（住民理解が進まない）イメージつけにくい。説明が大変。
- ”もやっと”するのはなぜか？ ゴールが見えないから？（目標）や（結果）

【Eブロック】

テーマ：生活支援COと協議体の活動状況について

- 大倉，作並地区。65歳以上仙台市高齢化率NO. 1⇒町内会の方と強みを見つけている。認知症カフェ年4回実施。
- 協議体⇒介護保険に関わっている方で土日顔を出してマッチング。本音を聞けるようになった
- 1名でスタート。地域福祉係3名。1層生活支援CO。4名の生活支援CO。地域に出向いて教えてもらう。地域の活動に参加。
- 協議体（包括支援センター 月1回，打合せ）勉強会，入り口大切。なんで協議会2回。清水先生に来てもらう。コーヒー，お菓子，ワイワイガヤガヤの方法。
- 地域包括今年から配置。（相談員，南三陸生活支援COを参考）宝のマップを参考（文字を少なく）住民に分かりやすい。
- 4月から2層生活支援COを委託。H17年4町1村大合併。9町1名。自治会地区社協の活動
- 小さな社協作り。担当40地区。255地区。住民説明，支え合い⇒社協として10年間⇒なぜ協議体⇒地区社協になぜ入れないのか。
- 1市6町合併。11地域。地域を育てる。分かっている人のところへ。理解を得るまで何度も説明⇒まちづくり担当課と一緒に動きワークショップを実施。⇒6か所，2層生活支援CO⇒福祉の知識がないため差がある。協議体ではなく，話し合いの場を設ける。
- 仙台市は第2層のみ。栗原市，亘理町，岩沼市，富谷市は第1層のみ。第2層設置準備中。メンバーをどうするのか？ 商工会，担当課以外の課，高校生，自治会，シルバーなど検討。
- 生活支援COは地域の方に顔を知ってもらうことから。⇒生活支援COの似顔絵入りチラシの作成。サロンやカフェに顔を出す。事業説明やアフターフォローも大切。資料作りから工夫。
- 行政区単位のグループワークを行った。⇒出てきた芽に生活支援COが絡む。
- 参加者の声：「なぜ参加しているかわからない」「来てもれって良かったと思えるものになりたい」「結局何の会議だったの？」
- 7～8行政区の協議体。2. 5層の協議体。ケア会議を協議体とみなしている。
- 全て生活支援CO配置済み。
- 協議体は大河原町と加美町がH29より設置。高齢者の現状や支え合い活動などを話し合い。
- 高齢者の移動について話し合いを行った。引き続き，地域情報の共有が大事。

テーマ： 関係機関、団体との連携、情報共有について

- 町社協→地域づくり（3層）手上げ方式。
- 中学校区 包括 50 広さ、大きさ違う。2層 3層こま切れ。担い手不足で大変。町中は人材がいるがやりたい事と人材のマッチングがうまくいかない。
- だいたい同じ人材になってしまう。
- 今やっている地域づくりと同じで焦らなくなってしまう。
- 2層旧町単位の役員組織→協議体プラス他団体の方、どのように入っていただくとよいか。
- 夢を語るような協議体があるといい→どうしたらいい 主体的に協議体をその気にさせる→支え合っ
て助けあってできない。
- 社協と一緒に動かなきゃ
- 5区生活支援COと区役所の情報交換の場がある。研修に各部署に声掛けしている。
- 県社協が支援に入っている。
- 生活支援CO同士のつながりがまだない。
- 社協と連携を前提に進めている。生活支援COの役割と被る。例) サロン立上げ。敵ではない協働し
ながら。
- デマンドバスやタクシーはあるが、高齢者がより使いやすい移動手段をどうしていくのかを関係機関
と協議していく。
- 栗原市（花山、鶯沢地区）では、社協の送迎デイサービス（有償ボランティア）をしている。登録制
での運営。病院限定の送迎サービス。

テーマ： 組織内部の連携、体制づくりについて

- 包括委託：個別ケースから出てきた課題が生活支援COにつながる（強み）。地区の方を集める声が
難しい。地区社協と連携（課題）。（第1層生活支援COが欲しい）
- 月次報告の様式がまだ決まっていない。市は数字を気にする（訪問件数など）→件数ではなく中身が
大切。なぜ件数が少ないのか説明できるように→生活支援COが外に出る事が必要。

自由記述

- 産みの苦しみがある。→AIには出来ないこと。
- 仕事をしている高齢者の増加。
- ライフスタイルの多様化。
- サロンも土日開催あり。夜間もあり。

【Fブロック】

テーマ：生活支援COと協議体の活動状況について

- 配置は1人 仙台全域で3回情報交換している。
- 配置先について社協や行政の連携については具体的にはわからない。
- CSWが入って情報交換をしてはいる。
- 事業を行政や社協と一緒にすることはある。
- お宝探しをしているが、そのお宝を続けていくことの難しさを感じている。
- 後から新しく作ったものが、古いものを潰す傾向がある。
- ボスがいて、そこには行きたくない人がいる。自ら入って行くことは難しい
- 生活支援COは包括OBが務めている。サークルなど高齢化が進み、世代交代が難しい。地域でも同
じことが言える。
- 市内には12包括あり、生活支援COは13人配置。濃密な活動が出来ている。
- 1層生活支援COは社協に委託。包括と密に連携。課題：1層協議体と2層協議体をどう繋げていく
か。現在は懇談会にて説明をし終えたところ。具体的に何をしたいか自分達も不明確。

- 1層社協から役場へ出向。「宝探し」の意味をみんなが理解できない様子がある。
- 宝探し（昨年）したものをマップにした。協議体の中身をどうするか。2町内会をモデル地区として助成金だして経過を見ていく（今年度）
- 生活支援COが地区の防災訓練・座談会に参加。困っているところ・希望するところをアンケートにして調査。→お金がない、通院・買い物、少子化で子どもが少なく寂しいなど。こちらが伝えたところと住民の温度差がすごい。協議体をやったから何…?。
- 協議体がない。ノープラン、ノーテーマでやったらいい？関係者の負担を増やすだけ？
- 協議体はつくっていない。どのような形でやればいいのか悩んでいる。
- 1層～3層を全て兼ねている。1層（年4回）2層（年2回）、3行政区 1単位ずつ協議体の場。3層 15か所で開催（昨年）。本年度11か所の計画。毎月協議体を開催している。
- 生活支援CO2名配置。大坂先生のPPTの地域づくりのP-8が一緒。今年度のテーマ 暮らしやすさについて企業を巻き込む。
- 昨年協議体4回開催。今年度は6月に1度行った。次回場所を変え、もちぶた館で行う。生活支援COは1層4名ですが圏域が小さいところは2層も兼ねている。移動のテーマで話し合い継続中。
- 協議体でワイワイガヤガヤするポイントや、生活支援COとしての地域の顔になつのがポイント。ファシリテーション力、場を盛り上げる力を身に着ける。
- 男性の参加はマージャンが活発。他関係との情報交換も重要。

テーマ： 関係機関、団体との連携、情報共有について

- ケアマネの立場で生活支援COとのかかわりは？包括と役場で月1回くらい会議。まだお宝探しの段階。紹介し合っていない。
- 新しい生活支援COが配名された。「男愉会（だんゆうかい）」男が楽しむ会。マージャン等こちらから仕掛け集まっている。地域によって集まり具合はバラバラ。足の問題もある。集まった人たちが自主的にやるようにお手伝い。リーダーがいないので、会場確保や菓子の準備を生活支援COがやっている。
- 話・輪・和活動。（人を集めるお手伝い）→2次予防教室（包括、社協）
- 保健師、包括、社協で活動（サロンや介護予防教室）
- 県社協の協力で講師に来てもらった。役場の職員同士でも認識に差があった。（事業の理解・整理必要）情報共有は協力的（聞けば教えてくれる、答えてくれる）
- 地域包括ケアに関していえば専門部会などで定期的集まり情報共有。市は一つの構成団体と考えてもらうようにしている。最初は行政に対する不満ばかりだったが、段々と回数を重ね雰囲気が変わってきた。
- 役場内での連携は取れている。居宅・老人会・民児協などに生活支援CO参加。サロン（社協）にも参加。社協本体との連携がイマイチ。
- 行政・専門職の理解・連携がいまひとつ…。プレイヤー（住民レベル）のほうが理解ある。
- 大郷町の居宅CM 地域の支え合い→プランに入れることについての確認。多い。
- 第2層のメンバー選び（20名）に苦慮→第1層があるなら、やりたい人、勉強会に集まった人で構成しては？
- 生活支援CO一人ですべての段取りをするのが大変。→行政、公民館（集落支援員）、生活支援COでの情報交換会防災マップなどで共同した。
- 関係づくりのために足しげく通う、気軽に声を掛け合える関係になる事も必要。
- 話し合いに車で来るなどと言われることもあり、お酒もコミュニケーションツール。
- 話し合いの場を変えることもあり。（大河原町もち豚館で開催することも）

テーマ： 組織内部の連携，体制づくりについて

- 高齢者と子ども，放課後の居場所づくり。
- 1層，2層の生活支援CO。地域をまわっているのは2層。1層の自分との考え方の違い。連携難しい。2層で解決できない問題を1層で理想だが…。
- 生活支援CO研修 地域関係者に受けてもらっている。同じ研修を受けてレベルを合わせて話し合いできるといい。
- 2層配置の話は出ているが，被災者支援で関わって来てくれた人たちを活用したい。生活支援CO初級研修を受けてもらっている。住民の「何かしなきゃ」という意識成就。
- 住民たちが意識していなくとも，実は生活支援体制整備になっていることもある。
- 包括の他の職員にも生活支援CO研修を受けてもらっている。

自由記述

- 地域社会 鈴木所長が弁護士や行政書士等を交えたネットワークを作ってくれる。生前よりサロン等にて遺産相続や終活について相談できる。
- 生活支援COは顔を覚えてもらうところから関係づくりは大切。良いことばかりではないが，自分が動いた結果への答えが期待されている。
- 1層のため，地域の人たちと顔を覚えてもらうほどの接点がない。2層との連携を密にしないといけない。
- 生活支援CO単独でやれる人のほうが少ない。業務を色々兼務している人のほうが多い。
- 他の職員と業務が重なるところがある。目的は違っても行くところが一緒だったり…。同じ組織から出ていくことに何の意味があるのか…。
- 報告の書式などあるか？
- 日報・記録表（地域活動の概要，考察，課題，写真など）毎日行政に提出。近隣市町村でフォーマットを持ち寄り情報共有する。
- 活動に参加したら報告書作成している。「半期ごと」と「年報」
- 協議体で課題解決・具体策までできなくていい。様々な形で楽しく話し合える場，できる人が出来ることを考えたり実践する。
- ファシリテーション技術も大切。

2 アドバイザー講評

- 協議体は，メンバーを固定したり，ルールを決めすぎると制約ができてしまい，話が盛り上がらないといった話がでた。協議体がきっかけで，郵便局・コンビニ・生協との繋がりが出来ており，相談が広がっている地域もある。
- 生活支援COの役割が浸透しきれていないことから，動きづらい部分がある。また，目的の共有化が組織内で不十分な場合，参加者をお客さんにしてしまい，話し合いが盛り上がらないことがある。
- 宝物探しや立ち上げを一生懸命行っている。地域のサロンに一般の企業と連携をし，いろんな人をまき込んでいる。白石市では自治会長さんが生活支援COになっている。子供を巻き込みながら，お手本になるような活動をされていた。
- 肩書のある方は，2年位で変わるので仕切り直しが大変。一方で，もともとネットワークがある地域は話し合いが盛り上がり，まとめるのが大変との声があった。協議体は話題が身近であればあるほど盛り上がる。話題は，高齢者の話題のみならず，ごみ屋敷や外国人の方のゴミだしの仕方など。
- 登米市では，協議体3年目にしようやく住民の方から意見が出てきた。3年間意見がでなくても，やり続けた忍耐に感動した。石の上にも3年である。
- 丸森町では，67団体取材し，「どうもないん」を作成した。やればできるという見本。地域のなかには，名前のない活動などまだまだ沢山あると思う。手上げ方式で関心のある仲間を募っていく方

法での仲間づくりも増えている、

- 3年間取り組んできたからこそ、語れる話が多くてた。兼務によるメリット・デメリットや、お宝探しの難しさについて話題になった。お宝探しをしていくと、自分の生活が脅かされる。なぜならイベントが多く、夜や休日などがつぶれてしまうためである。声を掛けられるのは、ありがたいことであり、お宝探しから地域との繋がりができている。
- 経験年数や立場が違うなか、悩みについて共有し、情報交換されていることに感動した。“行政連携と協議体をどうリンクさせていくか”、“行政内部の理解がなかなか進んでいかないのに、成果物を求めて来る”、“協議体の名称が堅すぎて集まるメンバーも気が重い”など話が出た。行政に、より理解を深めてもらう試みとして、協議体に34団体中10に行政の各課の代表をいれた。一つの話題について結論をだすのに時間がかかるが、まずはみんなでまとまっていくことが大事。
- とにかく地域の行事に出向いて参加しているとのこと。「何しに来たの」といわれるのが大きなチャンスととらえている。KKD（感、経験、度胸）が必要とのこと。
- 仙台市では、認知症の方のためのワークカフェを行っており、明確な解決策はでないが、話をしてくなかで、自分たちが出来そうな事が挙がってきた。協議体にもいえることかと思う。
- 協議体の進め方は中々ワイワイガヤガヤいかないことは、どの市町村でも現状としていえること。メンバーを固定しない、テーマ・議題決めないことで話し合いに広がりができる。結論は急がず、参加してもらい、話しをすることが現状では必要ではないか。形や体裁を整える協議体よりも、まずは集まってみて、みんなで話し合うことで何かが見いだされる。協議体を活性化することは、生活支援COを組織的に保管することにつながる。
- 生活支援コーディネーターを広報する際のキーワードは、「見える化」「単純化」でわかりやすく。文章や文字だけ羅列しても理解は難しい。
- 男性の方は数字に興味を示すので、相手に合わせた興味関心を入口にすることが必要。
- 宝物探しの活動の意味の大きさを感じた。宝物探しした後、共有し確認し合いながら地域づくりにつなげること。これからこんなものがあつたらいいという話から、メンバーを+αで変えてもいいのではないか。協議体の作り方もさまざま、あえて協議体を作らずにテーマごとに集まるなど、地域によって作り方はさまざまである。
- 大河原町では、年4回第1層協議体開かれ、今までは社協の会場開催であったが、8月はもちぶた館で開催、楽しい会でだれでも参加できる場と話が出た。また、生活支援コーディネーターの方は、ファシリテーション技術を磨き、盛り上げたり、フィードバックをする力をつけたい。
- 石巻市社協で13人の地域福祉コーディネーターが生活支援コーディネーターとなり、被災地支援の従事者が活躍している事に大変うれしく思う。地域共生社会実現のための下支えの役割を担っている。住民の方が我ことで地域づくりをしていけるように、住民のための基本的なソーシャルワークを研修をとおして学びながら身に着けてほしい。支援者の為の支援にならないように、住民が主役であると考えながら仕事をしてほしい。

3 まとめ 大坂委員長

重要なことは3点。1点目は内側・外側にどれだけ味方をつくれるか。1人でいろんなことを考えてる人がいるとのことであったが、1人では地域づくりはできない。2点目は明るく仕事が続けられるか、楽しんで仕事出来ているか。楽しまないと周りの人が地域づくりをしようと思えない。3点目は見える化をどれだけできているか。見える化するための法則を考えていくこと。この3点がじわじわと地域に浸透させていくポイントである。